

## 実践的コミュニケーション能力の基礎を養う小中一貫した 英語教育の在り方を求めて

— 中学校 1 年英語科の実践と指導計画の検討を通して —

村山 紀子

現在、京都市では小学校英語活動が全ての小学校の総合的な学習の時間に取り組みられている。中学校では、小学校英語活動の取組を生かし、小中一貫を見据えた指導が必要であると考え。そこで、本研究では、小学校と接続する中学校第 1 学年の指導計画に着目し、検討を進める。小学校英語活動で養われた「コミュニケーションに対する意欲」を中学校での英語学習につなげ、小学校英語活動の成果を踏まえて、中学校の目標である実践的コミュニケーション能力の基礎の育成を目指すため、指導計画を 3 つの視点でとらえ直した。指導計画の 3 つの視点を意識した実践授業の成果と課題を報告する。

### 第 1 章 実践的コミュニケーション能力の基礎の育成

#### 第 1 節 中学校英語学習の現状と課題

今日、中学校の英語教育で実践的コミュニケーション能力の基礎の育成が求められている。学校教育のなかで、基礎的で実践的なコミュニケーション能力を育てるには、各学校段階を通して一貫性のある指導を行う必要がある。そのため、小学校英語活動のよさを中学校英語学習に取り入れ、さらに発展させていくことが望まれる。

中学生が英語学習に何を求めているのかを知るために、研究協力校においてアンケート調査をし、生徒の声を聞いてみた。生徒は英語の学習をすることで、「英語で話せるようになりたい」「英語で書けるようになりたい」と願っていることが伺えた。また、本市の学力定着調査の結果から明らかになった課題と合わせて、生徒の願いやつまずきに配慮した指導計画が必要であると考えた。

#### 第 2 節 中学校英語学習の指導計画の検討

本市では平成 14 年に京都市教育委員会から「小学校英語活動指導計画と活動事例集（試案）」が出された。また、平成 17 年度からは、中学校と同じ外国語指導助手（ALT）が校区内の小学校を巡回指導している。そのため、概ね同じような英語活動を経験してきた子どもたちが中学校に入学してくることが予想される。

生徒は小学校英語活動を通して、「人と言葉でつながるよろこび」を感じ、その活動のなかで、英単語や、英語のフレーズを使いながら、英語でありさつができたり、自己紹介ができたり、先生や友達の話す英語を理解しようとする態度を身につけてくる。中学校の英語の授業では、小学校英語活動での成果であるコミュニケーションに対する意欲や身についた力をさらに伸ばしていく必要性を感じる。

### 第 2 章 実践的コミュニケーション能力の基礎の育成で大切にしたい 3 つの視点

#### 第 1 節 視点①「小学校英語活動で身についたことを生かす」

小学校英語活動のよさを中学校の英語学習に生かし、さらにコミュニケーションに対する意欲や、生徒の願いである英語の力を伸ばすために、指導計画の中に 3 つの視点を考えた。図 1 にまとめる。

視点① 小学校英語活動で身につけたことを生かす

視点② つまずきに対する支援を事前に準備する

視点③ 自己表現活動を大切にする

図 1 「小学校英語活動から中学校英語学習への接続のための 3 つの視点」

視点①では、生徒が、英語を口にすることに比較的戸惑いがなく、英語での発表を躊躇なくすることができ、英語を使った活動に対して積極的に参加するという小学校英語活動の成果を中学校の英語学習に意欲を持って取り組むという姿につなげる活動を用意したい。小学校英語活動のよさを生かしながら、段階を高めた活動となるように目標を設定する。そして、生徒がその目標にチャレンジする楽しみを得られるようにすることが望まれる。

#### 第 2 節 視点②「つまずきに対する支援を事前に準備する」

生徒の学習意欲を高めるために授業で大切なことは、生徒につまづかせないように配慮することである。しかし、現実には、生徒は授業の中でつ

まず姿が見られる。このため、事前に生徒のつまずきが危惧される場所では、それらに対しての手立てを用意しておきたいと考える。「どこでつまずくのか」「なぜつまずくのか」「どのような、支援・手立てが必要なのか」を事前に考えておくことは、生徒一人一人を大切に授業を構築するということになる。と考える。

### 第3節 視点③「自己表現活動を大切にする」

生徒が英語で自己表現活動を行う時には、生徒がそれまでに知っている語句や英文を使うことになり、小学校英語活動での経験が生かされる。そして、それぞれの生徒の自己表現活動を通して英語学習がどれだけ定着しているのか、また、どこにつまずきがあるのかを指導者が知ることができる。そして、それをよりよい指導につなげるという指導と評価の一体化を図ることができるのである。

年間指導計画の中では、これらの視点を踏まえながら自己紹介のスピーチを年に4回取り組むことを考えた。この自らを語るスピーチは「英語で話せるようになりたい」「英語が書けるようになりたい」という生徒の願いに応えるものでもある。中学生という多感な時期に、自分を見つめ自分を語ることは、この年齢だからこそ意味のあることであり、それを英語でできることは、英語学習においても大きな意義がある。と考える。

## 第3章 実践授業での様子

### 第1節 実践授業の成果と課題

Unit 1 Lesson 3～Unit 2 Lesson 5までの授業を3つの視点を明らかにしながらすすめた。

視点①に関わって、ビンゴゲームを生かしたオリジナル教材を製作した。小学校英語活動で行っていたカードを使った活動と、自己表現を支援、基本文の音声での定着を目指した活動を合わせたものである。Unit 1で学ぶ基本文や自己表現活動で使える英文を書いた16枚のカードを使う。そのうちの12枚のカードのキーワードと英文を指導者の発音をリピート



写真1 教材で活動する

しながら、カードを見つけて返す。縦、横、斜めに4つ返したカードがそろった数を競うという簡単なゲームである。授業の始めに毎時間取り組んだが、この活動を生徒はとて楽しんでいた。自己紹介のスピーチ

一稿にビンゴゲームで使った英文を自分なりにアレンジして取り入れる姿も見られた。

表1 ビンゴゲームで使う英文例（下線部はキーワード）

#### Unit 1 ビンゴゲーム

1. Baseball is an exciting sport.
2. I'm in the computer club.
3. I play soccer. It's fun.
4. I swim on Wednesday.
5. I want a dog.

### 第2節 スピーチにおける成果

第1回目の自己紹介のスピーチは6月に行った。一般動詞を7つ教えた後で行ったもので、約10文の自己紹介ができた。

第2回目の自己紹介のスピーチは10月に行った。生徒の精神的発達段階を考慮した、やや構造的なスピーチを目指し、スピーチの型（話型）を提示して行ったところ、20文程度の自己紹介ができた。

第3回目のスピーチは12月に行った。前回のスピーチよりさらに深く自己を語れるように、so, becauseの2つの単語を教えて行ったところ、内容的にも深い30文程度の自己紹介ができた。

この時期に自分の表現したいことを、やや構造的に考える方法を身につけることで、英語だけではなく、母語である日本語でもまとまりのある話をするようになるのではないかと期待している。

## 第4章 実践的コミュニケーション能力の基礎の育成をめざして

### 第1節 小学校英語活動と中学校英語学習をつなぐもの

中学校英語学習は、「聞く」「話す」の活動をたくさん取り入れながらも、「読む」「書く」活動も確実にしていく必要がある。「聞く」「話す」「書く」「読む」に正確さが求められる中学校英語では、小学校英語活動の成果を生かしながら、さらなる指導法の工夫が望まれる。

小学校英語活動の中で、子どもたちは自分の言いたいことを英語で表現したいという思いを大切に、温かい人間関係の中で生きた英語を使っていた。お互いの自己表現を受容的に受けとめ、それが繰り返される中で、豊かな人間関係が育まれる。心と心をつなぐことができるような英語が話せる実践的コミュニケーション能力の基礎の育成を中学校でも目指したい。そのために、生徒の話したいという思いを大切に、生きた英語で話せるような指導を目指したい。